



「和」と揮ごうした橋本行革担当相の胸の内は…(1.17)

# 日本記者クラブ会報

第372号  
2001年  
(平成13年)  
2月10日発行

〒100-0001  
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
日本プレスセンタービル  
©社団法人 日本記者クラブ

## 話題を呼んだ橋本会見

### 満点が三人 予想アンケート

新世紀幕明けの一月のクラブ行

事(記者会見)は、恒例の研究会「経済見通し」(四回)を含め、続けさまの計十四件。二日に一件を

こなす忙しきでした。

なかでも昨年暮れの改造内閣で入閣した元首相の橋本行革・北方沖繩担当相の会見(十七日)には、出席希望者が殺到、超満席の二百人強で打ち止めという大型昼食会となりました。内容も「あるべき公務員制度の白紙からの再設計」を力説、東京新聞が一面トップで報道するなど、各紙とも大きく報じました。

新年互礼会員懇親会も盛大でした。先行き不透明な逆風を吹っ飛ばせ、とばかり三百人を超す会員でにぎわいました。注目の「予想アンケート」開票結果は、堀川企画委員長から発表されましたが、

満点正解者は昨年より一人多く、

企画委員の宇治敏彦さん(中日新聞取締役編集・論説担当)と、田中忠さん(岐阜新聞取締役編集局長)、堀田稔さん(山形テレビ社長)の三人。いずれも仕事の都合で出席できなかったため、九点正解者だった企画委員の太田宏さん(読売新聞編集局長)に代理で表彰状を受け取っていただきました。

平均点は六・五点で、例年に比べて少しやさしかったようですが、その中で正解が二割しかなかったのが意外にも「シドニー五輪の女子マラソンで日本人選手は優勝するか」。堀川委員長の講評にもありました。委員のみなさんは、日本女子選手の実力をそれほど買っていないことになりました。日本人全体が自信をなくしている表れとも言えそうですが、未来へ向かっての羅針盤を見失わないようにしたいものです。

続いて行われた空クジなしの福引大会は一等賞が、なんと大阪から駆けつけた加藤博久・前理事長(読売大阪本社社長)に大当たり。当選番号を何度か読み上げても名乗り出る人がなく、無効寸前になって手を上げた加藤さん、「確かその番号は……」とボケットを探りながら差し出したチケットがドンピシャリ。産地直送の「ふぐちりセット」をゲットして、相好を崩していました。

### クラブ賞に九候補の推薦

今年の「日本記者クラブ賞」の推薦は一月三十一日で締め切り、九人がノミネートされました。新たな百年の最初の年にふさわしく候補者はバラエティーに富んでおり、選考が難航しそうです。推薦、選考両委員会での検討のうえ、四月の理事会で決定、発表されます。

法人賛助会員に新しくソニー株式会社とスカイパーフェクト・コミュニケーションズが仲間入りしました。法人賛助会員はこれで七十七社となります。

(専務理事 那部吉正)

ク ラ ブ ゲ ス ト

ロバート・フェルドマン モルガン・スタンレー・ディーン・ウィッター証券チーフエコノミスト

四回目の登板となるフェルドマン氏の景気診断は「リセッション直前の世界経済」という厳しいもの。

さまざま日本経済にとっての波乱要因は、米国景気の減速と株、為替、原油市況の動向。とくに、世界経済の機関車たる米国経済は史上最長の十年におよぶ四・五%の高度成長から、今年は一%そこそこに急降下。

これはアジア諸国の対米輸出減、生産減を通じて日本経済を直撃する。昨年つかの間の景気回復をみせた日本の景気も今年は〇・三%とゼロ成長ラインに逆戻りする。個人消費の不振、非IT投資の減退、不良債権問題の再燃がブレーキになるといふ。

しかし、米国はグリーンズパン魔術(積極的な利下げ姿勢)や新政策の減税など政策対応力の余裕から、短く、浅い不況に止まり、年後半から力強く回復し、日本も好転への手掛かりをつかむとのシナリオだ。

1・10(水) 司会 宇治敏彦委員  
出席 191人

富田 俊基 野村総合研究所 究理事

「景気重視か、財政改革優先か」。国論を二分する政策論争が飛び交う中で富田節は明解だ。

「バラマキ財政継続は日本破局への道」「財政再建こそ、むしろ好況をもたらす」と非ケインズ効果を指摘し、財政改革が急務と言い切る。

バブル崩壊後の「空白の十年」。欧米諸国が競って財政健全化に取り組み一方で、日本はひとり景気最優先を旗印に何でもありの財政刺激策(累計十回、百三十六兆円)を繰り返してきた。度重なるテコ入れでも景気は浮揚せず、日本の財政は加速度的に悪化し、古今東西史上でも比類をみない最悪の状態に陥っている。

巨額の財政赤字のツケと大増税、年金削減など将来不安が個人消費を萎縮させ、景気回復への芽を摘む逆効果を招いているという。財政再建、規制緩和の断行など構造改革こそ日本蘇生への本道だと説く。

松本 明男

(個人D) 会員 日刊工業OB

1・10(水) 司会 福沢重夫委員  
出席 186人

池尾 和人 慶応義塾大学教授

金融機関の不良債権問題は日本経済の見通しに大きな影を投げかけている。池尾さんは「景気の見通しは得意でない」と断りながらも、経済の悪化には「循環的な悪化」と「構造的な悪化」の二種があり、「循環的」は心配しないが、「構造的」は問題だ、と。

つまり、金融機関の不良債権処理が問題の先送りばかりで、根本的な解決が遅れていることが景気の低迷を招いている大きな原因である。もし、銀行が思い切って不良債権を処理すれば銀行にも損害が跳ね返ってくるのでやれなかった、という。

経済見通し 2001

今後の銀行は収益構造を確立しない限り生きていけないが、いまの銀行にはそのチエも経験も不足していると、厳しい。それにしても、バブル時代の銀行の行き過ぎた経営がいかに日本を悪くしたかを改めて考えさせられたレクチャーだった。

1・12(金) 司会 水野健二委員  
出席 178人

高橋 伸彰 立命館大学教授

国政 恒裕

(個人D) 会員 読売OB

政府の二〇〇一年の経済回復シナリオは破たんした、としたあと、堺屋前経企庁長官にも矛先が向かう。堺屋氏の見通しが当たったのは九八年七月の小湖政権誕生後九九年三月までの第一期(的確な景気判断と適切な危機への対応)までで、その後は第二期の「小刻みな上方修正」と景気優先・改革先送り路線への転換(二〇〇〇年三月まで)、第三期も「企業優先の判断先送りとIT頼みの回復祈願」(二〇〇〇年十月まで)、第四期の「後退する判断と出始めた家計軽視・改革先送りのツケ」(各期の特徴は高橋氏の命名)はいずれも外れたと厳しい評価を下した。

その上で政策・企業行動がうまくいけば三%成長も、そうでなければゼロ成長もとの判断。ゼロ金利については「解除が遅すぎた。政策の自由度確保が大切」と。

1・12(金) 司会 羽生健二委員  
出席 169人

ク ラ ブ ゲ ス ト

ジャン・ルミエール 欧州復興開発銀行(EBRD)総裁

来日の目的は、日本企業に対するPR。「日本はEBRDにとって最も重要な出資国のひとつ。しかし、対象国はまだ民間投資を必要としている」。元官僚だけあって、てんぷかつ明せきに、日本の果たす役割の重要性を説いた。

EBRDは旧ソ連や東欧圏の市場経済化を進めるため、九一年に発足。ポーランドやハンガリーなど中欧諸国の発展に貢献してきたが、ロシアや中央アジアは今後の大きな課題だ。日本政府は米国に次ぐ二番目の出資国だが、民間の協調融資ではまだ少ない。「ガス開発などが期待できるので前向きに検討してほしい」と協力を求めた。

日本の財務省事務次官にあたるフランス経済財政産業省国庫局長を経



て、昨年七月、ケラー氏(現国際通貨基金専務理事)の後任として就任した。怒りっぽい性格から「瞬間湯沸かし器」ともやゆされた前任者と違い、各国の利害がからみ意見が対立する理事会でも声を荒らげることは全くないという。

それでいて、困難な問題をまとめあげると評判だ。昨年十二月には、チエルノブイリを閉鎖する代わりに建設されるウクライナ原発への支援を決めた。「インターネットで情報公開するなどの姿勢が世論に評価された結果」(現地スタッフ)だという。

会見での質問は、マフィアの暗躍や貸し倒れの危険性が指摘されるロシア情勢に集中した。質問に注意深く聞き入り、「解決は容易ではないが、プーチン大統領になって政治的にも安定し、中小企業の返済率も上がっている」と強調した。

朝日新聞経済部

高野 弦

1・9(火)記者会見 司会 池田  
ル・アディソン委員 通訳 池田  
田 55人

ノーマン・ミネタ 米商務長官

十二回目の来日だそうだが、紺のダークスーツに赤いネクタイ。金髪のデニー夫人と一緒に会場に姿を見せた。六十九歳の年を感じさせない。

信念と直言の政治家である。一九九二年、当時のニコラス・ブレイディ財務長官が日本人を「ジャップ」と呼ぶと、「無礼だ」と辞任を要求し、謝罪させたエピソードがある。この日も、日本に厳しい注文が出た。

まず、日本経済の再生には「四つのCが必要だ」と言った。創造性(Creativity)、消費(Consumption)、投資(Capital)、そして競争(Competition)。米国がかつて、日本に学んで競争力を取り戻したように、今度は日本が米国に学んで、構造改革を急げと言うのだ。当面の具



和通子 和通子  
会委員 田美都  
会委員 田美都  
食修之 田美都  
会委員 田美都  
1.11(木) 田美都  
田美都 出席

体的課題として、昨年末に失効した日米自動車協定の合意と、調査捕鯨問題の解決を挙げた。

スピーチをこう締めくくった。「私はこの美しい父祖の国を何回も訪れ、二つの文化の懸け橋になるよう、いつも心掛けています。しかし、最も頼りがいのある懸け橋は、信頼と誠実さを基盤に築かれる。本日は日米両国の違いについてありのまま、率直に申しあげた。私は両国関係の永遠の重要性和、友人、同盟国、パートナーとしての輝く未来を信じているからだ」

日米開戦の翌年、十歳の時、静岡県出身の両親と共に、コロラド州の日系人強制収容所に送られた。そんな日系人十二万人への謝罪と補償を明記した八八年公民権法の生みの親でもある。だから、その発言は重い。クリントン政権で日系初の閣僚に。

今回、民主党からただ一人、運輸長官として横滑り入閣した。新政権の対日政策でも、重要な役割を果たすと思う。

共同通信編集委員

竹田 保孝

ク ラ ブ ゲ ス ト

ホルスト・ケーラー | IMF専務理事



見聞記者会委員  
二藤健生(金)記者  
池田薫(金)記者  
126人出席  
1.12可通出

世界の最大の関心事は、「アメリカ経済がソフトランディングに成功するかどうか」にある。失敗に終われば、日本を含めたアジア経済への影響は計り知れない。ケーラー専務理事の言い回しは微妙だった。「アメリカの成長が、持続可能でないことは明らかで、ソフトランディングは必要だ。このところの鈍化のペースに驚かされる人々も多いが、過度に悲観的になってはいけない。ソフトランディングは可能である」

冷戦の崩壊、金融市場の急速な発達、情報化の進展で、IMFの役割は変わりつつある。かつて、IMFはアメリカン・ヘゲモニーをバックアップする機関とさえ言われた。会場から「なぜIMFはワシントンか

らしか、物事を見ようとしれないのか」との質問が出るのも当然である。ケーラー専務理事は香港にオフィスを開いたこと、就任以来アジアを飛び回っていること、東京にも大きなオフィスがあることを挙げ、「地域密着型」への転換を強調した。

「IMFがいつも正しかったとは言わないし、間違いを犯さないとする傲慢な態度も取らない」とも言う。世界の為替取引が一兆ドルをはるかに超え、情報化の進展で一瞬のうちには数千億ドルが動くバーチャルな時代に、「万人に幸福をもたらす、秩序と安定」をどうやって実現していくのか。日本経済については「依然健全だ」との見立てと共に「グローバル・エコノミーに、インボルブされる必要がある」と語っているが、アシチ・グローバルイズムの視点が台頭しつつあることには触れなかった。ケーラー氏が強調する「構造改革」は、IMF自身にも求められているという気がする。

日本テレビ放送網報道局政治部長  
兼解説室  
倉澤 治雄

スペースシャトルSTS-92クルー

米スペースシャトル「デイスカバリー」に搭乗して、国際宇宙ステーションの建設に参加した七人のチームが全員顔を揃えたというのに、会場は満員にならなかった。

宇宙飛行士はもう珍しい存在ではなくなった。宇宙旅行も日常化に近づきつつあるということだろう。

宇宙に人間が飛び出すことは、以前は国家威信をかけた大冒険だった。だから生還した宇宙飛行士の記者会見には、わくわくするような熱気があった。まだ見たことのない異国の話を聞くような感動があった。この日の会見には、三十年前のアポロ計画のころのような感動はなかった。それは私ができる年をとったからではない。人間が宇宙で活躍するための技術が、不安を



写真=NASDA

感じさせないほど進歩したからである。昨年十月に実施されたこのチームの宇宙船外活動は、予定通りではなかった。デイスカバリー号の通信・レーダーが故障し、宇宙ステーションとのドッキング時にレーダーが使えなかった。ダフィ船長の話では停電もあった。当初とは違うやり方になった。「故障の時はどうするか」の訓練は十分やっていたから万全だった」と船長は語った。

「船外活動でコネクターがうまく働かなかった。飛行前にテストすべきだった」とも語ったが、この飛行で「宇宙ステーションの組み立ては成功することが確認できた」と宇宙活躍の将来に自信を示した。

ク ラ ブ ゲ ス ト

宇宙ステーションは「そこにいるだけでもワクワクする。人間にはこんなことができるのだという嬉しい経験をした」とマッカーサー飛行士は語った。宇宙旅行は近い将来、魅力的な産業になりそうだ。

宇宙の旅を楽しいものにする要素の一つは食事である。若田さんは十二枚の草加せんべいを持っていったが「かんだ時のパリッとした味は地上と同じで、大人気。隠さなければ

橋本龍太郎 行革・沖縄北方担当相

相変わらずの橋本節だった。よどみなく、こまかいことにも詳しく、君たち知っているかいといった感じの語り口、ともあれ橋本龍太郎氏の健在はうれしい。

橋本氏は会見の冒頭で、「中央省庁を半減するという思い切った改革案を私の個人的意見として初めて打ち出したのもこの日本記者クラブでだった」と語った。平成八年九月十一日の、その会見は私も聞いていた。そのときは橋本「首相」で、さあ、総選挙に打って出るぞ、橋本公約の目玉はこれだ、という意気込みを感じたものだった。



ならないほどだった」。宇宙食はこの三十年間に改良されたが、冷凍して水分を抜いたものを船内で水を加えて元に戻すので、味はいまいちらしい。宇宙ステーションでは日常生活の充実が課題ということだった。

個人D会員（読売OB）  
中村 政雄

1・15（月）記者会見 司会 今井彬委員 長沢光男委員 通訳 佐々江信子 藤田祐子 山川真弓 出席 76人

それから四年半。その間に橋本氏は首相を降り、後継の小淵恵三氏はこの世を去る。そして二十一世紀のスタートにあわせて一府十二省庁体制が発足したタイミングに再び行革

担当相に復帰とは、橋本氏は心ひそかに奮い立っていることだろう。

「器はできた。これにどのように魂を入れていくかがこれからの問題です。ハードの改革にふさわしいソフトの改革と言ってもいいでしょう」橋本氏は自分の果たすべき任務をこう表現した。具体的提案もたくさんある。

例えば、公務員に働いてもらうために、給与を年功給、職責給、成果給の三つに分けて年功序列を変えろ。省庁横断的な「国家戦略スタッフ」をつくる。民間や学界から人材を集めるため一定数のポストを公募制にする。

天下り問題に対処するために、官僚OBが出身官庁に許認可や契約を依頼したら罰則を与えるようにする。

これはなかなか大変な内容である。一つひとつ実現していくには、これから大変な苦労があるだろう。「世論の追い風なくしては、行政改革の成功はおぼつかない。その意味で、マスコミの役割は大きい」と橋本氏は締めくくっている。それが効いた

のかどうか、翌日の各紙の扱いは存外大きいスペースで橋本会見を報じていた。

橋本氏は行革担当であるばかりでなく、沖縄・北方も担当することになっっている。沖縄はあの普天間基地の返還問題、北方とはとりもなおさず日本とロシアの平和条約の問題だから、いずれも首相在任当時から橋本氏の特別の思い入れのあるテーマである。

「筆舌に尽くしがたい苦難の道を歩んできた」と橋本氏が表現する沖縄は、なお「経済の発展、振興開発が必要」というのがポイントである。北方領土については「私としてできることがあれば惜しみなく協力したい」と言明した。このあたり、河野洋平外相と仕事がかちあうことはいかどろか、森内閣の微妙な問題にもなりそうである。

朝日新聞編集委員 早野 透

1・17（水）昼食会 司会 川戸恵子委員 神志名泰裕委員 出席 208人

ク ラ ブ ゲ ス ト

緒方 貞子 前国連難民高等弁務官



緒方さんの日本記者クラブでの話は一九九八年九月に続き、通算六回目。昨年末で国連難民高等弁務官をやめ、今後の活動拠点を日本においてのいわば第一声で、これまでどんなことをしてきたのかという「十年の歩み」を率直に話した。

モザンビークやアフガニスタン、ティモールなど各地の難民の実態を紹介しながら、この問題が抱える難しさを明確に指摘した。そして「時間をかけて国際的にみんなが努力すれば、この問題を解決できることを実感した」と。難民を保護して、国へお帰りなさい。そしてさようならではなく、国際社会がいろんな知恵を絞り、問題解決への方向づけをすることの必要性を強調した。

例えば、大量の難民が発生した場合に備えての緊急援助体制の確立の重要性、その後安定化へと向かうプロセスでの「橋わたし役」、帰還後の「共生できるコミュニティづくり」、そして常に「難民と共にいる」ことの重要性を世界各地の難民キャンプなどでの現場体験からにじみ出る話には極めて重みがあり、強い印象を受けた。

しかしその反面、日本政府の難民問題への対応には随所でそのもどかしさをのぞかせた。日本の総理がアフリカのサハラ以南を訪問したのが、今回が初めてのことに「ショッピング」だとし、難民の受け入れやODAのあり方、日本人として何ができるのか。グローバル化が進む国際社会の中で、日本はなんとなく内向きになってきたのではないかと結んだ。

NHK解説委員

堀 徹男

1・19(金) 記者会見 司会 住川治人委員 出席 103人

ポール・ニールソン 欧州委員(開発・人道援助担当)

貧困国の開発や人道援助のあり方を日本政府と協議するために初来日。「貧困と闘い、開発を促すためにEUの戦略」をテーマに、記者会見にのぞんだ。

ニールソン氏は冒頭、約二十分間にわたり、貧困国の開発援助に取り組むEUの姿勢を説明。日本とEU加盟国が政府開発援助(ODA)予算の主要な拠出国であることに触れ、日欧協力の必要性を訴えた。さらに、EUとして今後、貧困対策に取り組むために、通商の拡大、インフラ整備、食糧供給など六分野について支援を具体化させていく方針を示した。

また、国連のシステムを活用し、日本以外の援助拠出国とも連携するとともに、各国民に理解を求めている。



く重要性も付け加えた。

質疑応答では、日本の貧困国対策、アフリカの重債務貧困国に対する債務削減、EUの移民対策など、七項目の質問が寄せられた。ニールソン氏はその内容をメモに取りながら、ゆっくりとした口調で丁寧に答えていた。日本政府が二〇〇一年度予算案でODA予算を前年度比三%削減したことについて、「日本国民が決めることで、(質問に)わざと言及しなかった」とかわし、日本政府に対する配慮もにじませた。

また、会見前に行われた河野外相との会談については、「意見の食い違いはなかった。非常に前向きな話し合いだった」と述べ、今回の訪日の成果を強調してみせた。また、質問の間には「ジャーナリストと一緒にいるのは楽しい」と冗談も飛ばし、出席者から一笑を得る一幕もあった。

読売新聞国際部

本間 圭一

1・23(火) 記者会見 司会 ゲハルト・ヒールシャー委員 通訳 友田真理 出席 58人

ク ラ ブ ゲ ス ト

コフィ・アナン 国連事務総長



ナーネ夫人とともに

アナン事務総長はPKO局長時代からいつ見ても姿勢がいい。四度目のクラブ会見とあって余裕を感じさせるアナンさんに、安保理改革は「常任、非常任とも増やし、枠は二十四という動きか」とずばり切り込んでみた。安保理問題はネットワークがふたつあり、ひとつはコーヒー・グループが「非常任のみの拡大」に固執していること。いまひとつは米国が「最大でも二十一」と譲らず、二十四を主張する日本などは困り果てている。

ここへきて、フルチ・イタリア大使が退任。米国もホルブルック大使の譲歩で一気に改革への流れができつつあるとの情報があったため、質問してみたのだが、「あなたのいう方

向で動いている」という意外なほど明快な答えが返ってきた。

北朝鮮訪問に意欲をみせたのは当然だろうが、会場がわいたのは再選への意欲をきかれた時だ。「難しい決断だが三月に決める」と答えた。やる気があるということだろう。

事務総長は通常二期十年やるが、ブトロス・ガリさんが一期でやめたため、アナンさんはもう一期だけという含みで事務総長になった。再選は求めないはずだったが、ここへ来て色気が出てきたようだ。アフリカの次はアジアの番。緒方貞子さんの可能性も膨らむだけじゃなかった。批判の多い国連。アナン氏は白い紙に描かれた黒い点の話を持ち出し、小さな点ではなく白い部分を見てほしいと訴えた。少し疲れているのだろうか。ナーネ夫人が心配そうに見つめていたのが印象的であった。

日本経済新聞編集委員

原田 勝広

1・24(水) 記者会見 司会 住川治人委員 通訳 キヤサリン・スターリング 大野理恵 138人

藤原 作弥 日本銀行副総裁

アイ・シャル・リターンではないが、「帰って来た企画委員」という感じだった。ご本人も当クラブ企画委員時代には通算八十四回も司会をつとめた超ベテランで、第一号功労会員だが、ゲスト席の真ん中に座るのは初めてとあって、照れ笑いしながら腰を下ろし、旧知の会員たちと目であいさつを交わしていた。



「橋本首相から副総裁の就任要請を受け、三日間逃げ回っていたが、最終的には公への心で引き受けた」と日銀幹部に転身した裏話を披露した後、本題の「日本銀行の政策と業務運営」では、日銀のリストラの状況、景気の現状と展望、当面の金融政策などについて分かりやすく解説。国民から批判された高給と水準や豪華支店長舎宅などについて「組

合に頭を垂れるほど給与水準の適正化に努めた」「支店長舎宅は賃貸マンションに切りかえつつある」「ゴルフ会員権は全部売却した」と力説した。

長い伝統を持つ中央銀行の改革は一朝一夕にはできないが、「誇り」と「埃(ほこり)」の両面からジャーナリスト精神でチャレンジしている姿勢がうかがえた。ある会員からの「日銀副総裁になって一番驚いたことは？」との質問には「何々を『させていただきます』といった表現の多用や、行員がおじぎを深々とすること。日銀内の日本語改善の研修をやっている」と答えていた。

一部に「高齢の速水総裁に引退を勧めては」といったいじわる質問も出たが、総じてアットホームな昼食会だった。藤原氏の揮ごうは「説明責任」。新世紀における中央銀行の存在感拡大に当クラブ功労会員のますますの活躍を祈りたい。

中日新聞社取締役編集担当兼論説担当 宇治 敏彦

1・31(水) 昼食会 司会 川戸恵子委員 宇治敏彦委員 出席 136人

## ク ラ ブ ゲ ス ト

## マイク・ムーア 世界貿易機関(WTO) 事務局長



会見全体を通して強く印象に残ったのは、ムーア事務局長の国際機関の長としてのプロ意識と目配り・気配りだった。

次期多角的貿易交渉(新ラウンド)開始を目指して文字通り東奔西走の同氏。来日は、一月三十日。スイスで開かれていた世界経済フォーラム年次総会(ダボス会議)からの直行だ。三十一日夕の離日を前にした慌ただしい中での見だったが、新ラウンドの理念、立ち上げに向けた手順、山積する課題などについて冗舌に語った。

立ち上げに失敗した一九九九年十一月のシアトル閣僚会議の教訓は、と問われた同事務局長は「大きな差異を残したまま会議を開くのはよくない。準備を徹底的に行わなければ

駄目。途上国に対してもっと敬意を示すべきだ」と指摘。三月末にも非公式の閣僚会議を開催、その上で秋のカタル閣僚会議にのぞむ考えを示した。用意周到だ。

用意周到さは、ムーア氏本来のものだ。元ニュージーランド首相にして五十一歳の若さと聞いて驚くが、十五歳で家計を助けるため学業を断念、二十三歳の若さで国会議員になるまでに建設労働者など職業を転々。対外関係・貿易相、外相などを歴任し、首相にまで上りつめた人物と知って納得する。

遅れる新ラウンド立ち上げと、世界各地で加速している二国間・地域貿易協定の動きには「日本や米国のように大きな国はいいが、取り残される弱小国はどうなるのか」と疑問を投げかけ、多角的アプローチの重要性を強調した。

時事通信社編集局総務兼解説委員

中村 隆二

1・31(水)記者会見 司会 小池洋次委員 通訳 池田薫 出席 96人

▼記者でない会員の疑問 会員となつて十六年半、納得がいかなないことがある。そのひとつは、クラブでの記者会見が新聞紙上で報道されないことが多いことである。多数の現役記者が出席し、焦眉の問題について重大な発言があったときでも、紙上で無視されることが少なくない。

その一例は、やや旧聞に属するが、昨年七月十九日のバシェフスキーUSTR代表の会見である。NTTの接続料の引き下げについて、当時報道された二二・五%での決着と異なり、バ代表は、地域レベルで五〇%、個人レベルを含めても全体で約三三・五%で合意したと述べた。にもかかわらず、私が読んだかぎりでは、日経のフィッシャー副代表とのインタビュー記事の中に五〇%が言及されていた以外、全く報道されていない。これは、どういうことなのだろう。私の聞き間違いでなかったとしたら、日本側が当局詰めクラブに対して行ったレクをうのみにした記事が各紙で採用され、日本記者クラブでの会見が無視されたのだろうか。あるいは、バ代表が合意点を勝手に拡大して話したのだろうか。いずれにしても、日米交渉やIT革命における接続料問題の重要

性を考えると、この食い違い自体が面白い記事の材料となりえたはずである。

そうならなかったのはなぜだろう。日本側当局の発表を丸のみするだけでなく、交渉の相手方へも直接取材して、広い視野から報道することは、なぜできないのか。番記者とか、当局詰めクラブから流れる情報だけに、読者を頼らせてもいいのだろうか。

外国の重要な賓客が、外人記者クラブよりもわが日本記者クラブで会見を行うようになってから久しい。この貴重な機会が十分に活用されていないのは、現役記者やデスクだけの責任なのだろうか。日本記者クラブとしてできることはないのか。

特別賛助会員 緒方四十郎

▼OB会員の提案 研究会など、いずれもすばらしく感謝している。それはそれとして司会者が最後に、「大きな拍手をして」というのは外国のゲストの会見ならともかく、なじめない。講師の先生だって、これが合図で拍手が起きては愉快じゃないだろうし、反対意見の方もいようし。自然に「が一番なのではないだろうか。」

個人D会員(日経OB) 大留明夫

## 会員の声



## デジタル放送時代

でもカラーの番組を（白黒ではあるが）見る事ができた。ところが、今回はそうはまいらない。やはり、BSデジタルの受信機かチューナーを買ってもら

必要がある。アナログとデジタルの間には、画然とした一線が引かれているのである。正直な話、BSデジタル放送を始めてみると、電波を出す放送局側でも受信機サイドでも、機器にいくつか不具合は生じた。ただし、そのほとんどは新しい技術（ソフトのダウンロード）などによって改善できる。その意味では、不具合の発生状況は予想の範囲内、と言える。

BSアナログの場合、テレビ放送を行っているのはNHKとWOWOWの二社のみ。そして、有料放送事業者としてのWOWOWは、コンテンツの調達・制作、編成、放送設備を保有しての送出・送信、BSの所有、加

しかし、BSデジタルになると、テレビ放送事業者だけでWOWOWなど八社。BSや送信設備の所有者は他社だし、デコーダに代わるB-CASカード（注）も別の会社が扱う。今年秋以降にスタートする110度CSになると、事業者は十八社にハネ上がり、顧客管理などを行うプラットフォーム事業者も複数になる。ようするに、放送事業者の数はどんどん増える一方、その仕事は細分化され、そのそれぞれに異業種（たとえば家電メーカーや通信事業者、商社など）や外資が新規参入してくる。温室で視されてきた放送事業のビジネス・モデルが、がらりと変貌しつつあるのだ。

# 放送の門戸は大きく開かれた でも、どんなビジネス・モデル？

中瀬 信一郎

（WOWOW取締役本社部門長補佐）

「今日からBSデジタル放送が始まるというから、チャンネルを合わせていたのに、全然映らんじやないか」

お客様からの問い合わせに答えるカスタマーセンターに、こんなおしかりの電話がかかる。よくよく聞いてみると、BSアナログの受信機は持っているが、BSデジタルのそれは置いてない。混乱するのも、無理はない。かつて白黒テレビがカラーテレビに移るときは、古い白黒テレビ

先日記したアナログとデジタルの間の画然とした一線——それは機器やコンテンツだけではなく、実はビジネス・モデルに最も太く引かれているのではなからうか。以下は筆者の自問自答ののだが——。

いくつも出現したビジネス・モデルのうち、どれが最も有望なのか。さらにCATVや光ファイバー、モバイルなど伝送路のプロードバンド化、インターネット放送の進歩などを視野に入れると、ハテ、回答は——。それがまだ見えないからこそ、放送に携わることが改めて刺激的になった、のではなからうか。

（注）B-CASカード 受信機などに差し込んで、顧客管理や双方向放送などに活用する。

## スエズ運河再開前後



平山 健太郎

時期をどうリンクさせるかなどの議論は先送りしながら、運河再開に向けた準備が着々と進められていた。

まずは運河の兩岸や水路の中から地雷、機雷、不発弾など爆発物をは

じめ、様々な障害物を取り除く作業である。米軍のベトナム撤退を取り決めた「パリ協定」（七三年一月）に従い、米海軍はハイフォン

港や沖合など北ベトナムの港湾を封鎖していた機雷原を除去しているが、その体験を積んで間もないヘリ空母「タラワ」が、ポートサイド沖に姿を見せ、そこから飛び立つヘリコプターの編隊が、機雷除去の索具を運河の水面に、みずすましのように入行しながら作業していた。それを、上空を飛ぶ米軍提供の別のヘリからカメラにおさめたりした。

エジプトの情報省当局や運河地

帯を管理する軍の担当官は当時まだ頭が固く、撮影には腹が立つほど制約が多かったが、サダト大統領の側近として頭角をあらわし、のちにその縁戚にもなるオスマン・オスマン建設相のヘリにも同乗したことがある。現役の建設相でありながら、大手土建会社の経営者を兼ねるといふサダト政権の「改革開放」ぶりを象徴するような人物で、このヘリの機上からは、軍事機密もなんのその、見えるものはすべて撮り放題という恩恵に浴したものだ。

障害物の除去だけでなく、水路に沈殿した土砂のしゅんせつも欠かせない作業になった。スエズ運河にはもともと水路を広げ、深さも掘り下げる拡張構想があり、日本の五洋建設が落札していた。

運河の中間点に近いイスマイリアの運河岸に水野哲太郎副社長（当時）が入札に訪れた当日、第三次中東戦争でシナイ半島のエジプト軍は雪崩を打って敗走中だったという因縁もあり、硬い岩盤を



私の手元に一枚の私製の郵便切手（写真）がある。操艇競技の開催を記念する素朴な木版刷りで、左上に「G. B. L. A. Postage」の文字。スエズ運河の中間にあるグレート・ピクチャー・レイク（大鹹湖）に、一九六七年六月の第三次中東戦争以後閉じこめられていた二十数隻にのぼる外国

大型船舶の船員（保安要員）たちが、無聊をなくさめていた名残だ。

私がサイゴンから横滑りでカイロに赴任したのは七四年の早春。

前年十月の第四次中東戦争で、エジプトは、運河の東岸（シナイ半島側）に辛うじて橋頭堡を確保し、キッシンジャー米国务長官の調停に下駄を預ける形で、自国に有利な戦後処理と、ソビエト陣営から西側への乗り換えというサダト一流の離れ業に励んでいた時期である。一連の戦後処理の中でもとりわけ注目されていたのが、スエズ運河の再開準備であった。イスラエル軍の撤退の度合いと運河再開の

掘削する同社誇りの作業船が、この機を待ちかねたように、運河南端のスエズ港をベースに、作業を始めていた。不発弾が掘削機や吸引パイプの中でさく裂して破損するなど苦労が多かったようだ。熟年の潜水作業員のおじさんが「函館の海にいるのと同じカニがスエズの海底にもいて気持ちが悪まるよ」と東北弁で述懐していた。

◇  
カイロから砂漠を横切り百キロ余り離れた運河地帯に通う日々が続くうち、年が改まって七五年三月、NHKの解説委員であった平沢和重氏（故人）が、親友である三本総理の親書を携えてナイル上流アスワンの別邸に、サダト大統領を訪れたことがある。私も同氏のかばん持ちで同行したが、その席でサダト大統領は、近々スエズ運河を再開するつもりだと話してくれた。言葉違わず、サダト氏は翌四月エジプト国会で、スエズ運河を第三次中東戦争開戦八周年当日の六月五日を期して、再開する

と声明した。イスラエル軍砲兵部隊がまだ運河の射程距離にいる時期の、一種捨て身の賭博だった。

さて、再開当日である。テレビ朝日が当時はまだ珍しかった移動式の衛星地上局を携え、ポートサイド港での祝賀式典の模様や祝賀船団の出発風景などをカイロから録画中継する……という計画を耳にしたが、我々には予算がない。ベイルート駐在の木村太郎君、パリ駐在の曾根俊郎カメラマンの来援を得て、当日は米英系ネットワーキング映像で対処。自社素材は、撮り溜めて東京送りが済んでいる素材に、当日取材分を最寄りの便で空輸し、翌々日のドキュメンタリー番組で扱おうということになった。そこに一つの幸運が舞い込んだ。祝賀船団の先頭に立つエジプト海軍の駆逐艦「十月六日」号にサダト大統領と同船する日本ジャーナリスト一名の枠に、私が潜り込めたのである。もちろんプーラーの立場として、私の送稿は各社に配分されるわけだが、同艦のテ

レックスを使えば、運河航行中のリアルタイムで、当時の夜のメーニュー番組「NC9」に突っ込めるし、磯村尚徳キャスターが、「実はうちがプーラーで……」など何とかプレイアップしてくれるだろう。撮影も出来るし……とカメラを抱え、木村、曾根両君に岸辺の取材を委ねて乗船した。

提督姿のサダト氏を取り巻くように三人の青年が乗ってきた。自分の息子、パレピ国王の皇太子レザ、そしてナセルの息子であった。故ナセル大統領の息子を招いたのは、この運河再開にイスラエルとの「単独講和」への臭いをかきとって批判する「ナセル派」の懐柔を試みたものだろう。

群衆がマストまで鈴なりになって船団に擦り寄ってくる漁船、艦上でのサダト大統領との短いインタビューなど雑観をまとめて打電し終わったころ、船団は、運河岸庁舎に面したティムサ湖にたどり着き、「十月六日」号は、右折して湖に入った。

後続する船団を振り返って驚いた。「十月六日」号に続いて、同型の駆逐艦「フリーア」、輸送艦「シリア」、同「アイーダ」。ここまでが第一グループで、ソビエト貨物船を含む内外の高船船団が第二グループとして後続するというのが、エジプト政府の事前の発表だったが、第一グループの末尾に、群を抜く巨艦が一隻飛び入り参加しているではないか。星条旗を高々とマストに掲げたアメリカ第六艦隊の旗艦「リトルロック」（巡洋艦）であった。

以後、湾岸戦争を経て現在に至るエジプト、いや中東、湾岸全域にかけてのアメリカの「覇権」の確立を端的に象徴する情景であった。「プール」稿に間に合わなかったこの情景を翌朝のニュース送稿の目玉に据えたのは言うまでもない。

ひらやま・けんたろう会員 一九三一年生まれ 五六年日本放送協会入局 プエノスアイレス リオデジャネイロ サイゴン カイロ各支局長 外信部デスク 解説委員などを務め 九二年退局 現在 白鷗大学教授

## 書いた話

## 書かなかった話

## ワーキング

## プレス

「予想以上に窮屈だなあ」「荷物  
が収まり切らないよ」。一月四日、  
総務省が入居する合同庁舎新二号  
館の八階に設けられた総務省記者  
クラブ。新年のあいさつを交わし  
ながら引越しの片付け作業に追  
われる新しい居住者の間からほや  
き声が漏れた。

総務省発足に合わせて郵政、自  
治、総務の三クラブも統合。総務  
省クラブには、各社とも旧クラブ  
に配置していた記者がほぼそのま  
まの陣容で引越してきた。クラ  
ブに机を持つ常駐の記者数は八十  
人を超える大所帯。自治省(内政)  
クラブと比較すると、人数はほぼ  
二倍になったのに対して、クラブ  
のスペースは一・五倍程度。人口  
密度が高くなるのは当然だ。机  
の配列は、教室形式で社ごとに横  
一列に並び、各社の間には一・七  
メートルほどの高さの仕切り。机  
の端と仕切りの間は一メートルし  
がなく、各社とも仕切りに挟まれ  
てウナギの寝床状態だ。列の中程  
の席にたどり着くには体をねじ曲  
げて入り込まなければならない社  
もある。

## —総務省記者クラブ—

人数は2倍に  
スペースは1.5倍

▶ 大谷 徹  
(共同通信社)

必ずしも快適とは言えない居住  
環境だが、総務省スタートから十  
日も経ち、荷物を運び入れるのに  
庁舎中に張りめぐらしていたベニ  
ヤ板上のクッションが取り払われ  
るころには、愚痴も消え、違和感  
も薄らいできたようだ。

しかし、従来から旧省庁間の接  
点が少なく、木に竹を接いだよう  
な組み合わせと揶揄(やゆ)され  
る総務省。「統合の成果を国民の皆  
さんに分かってもらえよう」に一  
致結束して……。片山虎之助総務相

が繰り返し強調する「省内の融和」  
だが、旧クラブ間の仕切りは高く、  
縦割り行政に対応した取材態勢を  
組まざるを得ないのが実態だ。

クラブ構成は、旧郵政クラブを  
受け持ってきた経済部、旧自治省  
担当の内政部・政治部、さらに旧  
総務庁の政治部など。再編に伴っ  
て共同通信の場合、総務庁の取材  
を政治部から内政部が引き継ぐ担  
務の見直しを実施。記者数は従来  
の配置数と同じ計七人の布陣でス  
タートした。

ただ、閣議後の大臣会見や事務  
次官会見などを除いて、情報通信  
など専門性の高い郵政関係のレ  
ク、取材は経済部の記者がカバ  
ーし、内政と政治両部はノータッチ。  
逆に内政部などが受け持つ自治、  
総務関係の取材には、経済部はコ  
ミットしない。クラブに置かれて  
いる広報用のホワイトボードも旧  
省庁割。全体のスケジュールは一  
枚紙で掲示されるが、その他の告  
知は、クラブ側の要望で旧省庁別  
の張り出しになった。

レクや資料配付など発表の取り  
扱いも旧省庁間で異なる。民間企

業との接点が多い旧郵政省は、ほ  
とんどが発表後即解禁のトク扱い  
なのに対して、旧自治省は解禁付  
きの縛りとなるケースも少なくな  
い。混乱を避けて従来通りの方法  
を当面は踏襲することにしたが、  
いずれ発表方法も統一が必要だ。

その黒板協定の扱いも、スケジ  
ュール掲示後に一社でも発表前に  
記事化する旨の通告があれば即座  
に協定が解除されるのが旧郵政ク  
ラブ側のルールで、旧内政クラブ  
に比べて協定自体が緩やか。新ク  
ラブは郵政ルールを引き継いだ  
が、旧省庁ごとに長年、育まれた  
クラブ「文化」の違いによって今  
後、当局側との摩擦も予想される。  
「取りあえずひとつ屋根の下に  
入ったけど、これからどうなるこ  
とやら」とある若手官僚。この巨  
大省庁が何を考え、どこに向かお  
うとしているのか。試行錯誤を繰  
り返しながらか旧クラブの縄張り意  
識を排し、一致結束して取材に当  
たる必要があるようだ。

おたに・とある 一九八四年入社 福島支  
局 福岡支社などを経て九七年から本社内  
政部 現在 総務省記者クラブキャップ

●柳田邦男氏講演会(1.24)●

会合紹介

「二十世紀とは何だったのか？」―戦争、革命、大衆文化の勃興。そして、経済活動とシンクロして世界を席巻する科学技術の世紀であり、その激流の中で、ヒトは何をゲットし、何を失い、どう傷ついていたのか。

柳田氏の講演は、静かに二十世紀を振り返ることから始まった。「マッハの恐怖」以来の鋭い視座が、まだ漠然とモヤモヤと、その渦中にあるような体感のする過去の世紀を、冷静に沈殿させていく。

公害、災害、戦争、救命医療とあらゆる分野に、精妙な調査と分析で切り込んでいく、そのエネルギーの素はこれなんだ。言葉の端々から、だんだんと熱いマグマが顔を見せ始め出す。

「記号化したり、効率化したりなどできないもの。それが人の情動や魂といったあたたかいもの。そしてそ

「いのちの世紀」への提言

れが、「いのち」の総体としての人の存在です」

技術や経済発展の嵐の中で、さまざまなネガティブ状況に置かれた人間たちの「心や、魂の壊れが、目に見えぬ危機として積み残されている」ことに気づくことが新しい世紀の初めに一番大切なこと、とやさしく微笑む。

「未来をひらく日本委員会」の尾畑雅美代表（会員・NHKB）から、二十一世紀のキックオフの相談を受けたとき、一にも二にもなく「いのち」をテーマに、と申しあげた日を思い出



講演前の貴賓室で、柳田氏と筆者  
(写真家 穂積義典氏提供)

す。柳田氏をおいて他にない、と思いつつ超々ご多忙故に、まず無理では、と私。

ところが、そこがそれ、尾畑代表の恐ろしいところ。なにせ、選挙直前、世界中のマスコミをシャットアウトしていた、かのブッシュ現大統領に会ってしまおう方だ。

僕と握手する人はなぜか天下をとる、と言う心臓発毛三つ編み行動の人。ついにプレスセンターでの開催を実現してしまった。

日本記者クラブの杉田亮毅理事長は「われわれマスコミも、新世紀は『いのち』を守る視点を大事にして誠心努力したいと思います」とお礼のあいさつで見事に閉められた。

乾ききった三人称でもなく、寄り添いすぎる一人称でもない『二・五人称』のまなざしを提言した柳田氏。今世紀もまた、たくさんさんの灯を私たちの「いのち」ともしてくるに違いない。

個人D会員 野中ともよ

□会議報告□

第218回会報委員会

(1・10 小会議室)

十二月号、一月号について意見交換した後、二月号の編集を協議した。

出席 住田委員長、大留、進藤、仲

平野、堀江の各委員。

第281回会員資格委員会

(1・17 小会議室)

二月一日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 山内委員長、菊池、高橋、和

田、船田の各委員。

第295回企画委員会

(1・18 宴会場)

五月の総会記念講演の講師候補と参院選前の企画について協議した。

出席 堀川委員長、清本、小池、花

岡、鳥居、神志名、川戸、羽

生、足立、和田、今井、長沢

の各委員。

△法人会員代表変更▽

大分放送

(新)菊池 征雄 役員待遇東京支

社長

(旧)加島 周一

# 会員懇親会

新年恒例の会員懇親会が一月十八日(木)午後六時から十階ホールで開催されました。まず杉田理事長があいさつ、続いて昨年の「予想アンケート」の結果発表が行われました。

## 宇治、田中、堀田三氏が満点

回答者三十七人の中で、快挙を達成したのは宇治敏彦(中日)、田中忠(岐阜)、堀田稔(山形テレビ)の各氏。欠席の三氏に代わり、一步及ばず九点だった太田宏企画委員(読売)



満面の笑みで「大阪から来たかいがありました」

が、堀川企画委員長から表彰状と記念品(万年筆)を受け取りました。

## 加藤前理事長に福引一等

会場からの「オーッ」という声に押されて登壇した加藤博久前理事長(写真上)には、一等賞のふぐちりセットの目録が手渡されました。「二十余年間連続してアンケートははずれ、くじも当たらず…今日も三等賞の番号に一番違いだったので、またかー」と思っていました。それがなんと一等賞とは。しかも、朝日新聞社提供の景品が当たるなんて光栄ですよ」と喜びの言葉。

「福引」上位当選者は次の方々でした。(敬称略)

- 一等(ふぐちりセット)加藤博久(読売大阪本社社長)
- 二等(カシミアマフラー)村上重美(新聞協会専務理事)
- 同(米ひとめぼれ(一〇キロ)佐藤耕太(新聞協会OB)
- 三等(和装用婦人時計)野村忠夫(NHKOB)
- 同(携帯液晶テレビ)関口欽也(日経・日本短波OB)

## 満点

翌日、電話取材した満点獲得者のコメントは以下の通り。

宇治会員「企画委員として問題を作った側なので気恥ずかしい。一内閣一仕事」という言葉が昔あったけど、今は「一年一内閣」。ここ数年の「正解」をみてもそれを痛感しますね」  
田中会員「岐阜出身の高橋尚子さんはずさなくてよかった。一月の投票時点ではまだ五輪選手にも決まっていなかったんですから」

堀田会員「もう何年間もずっと投票してきました。新聞社最後の昨年に予想が当たって、しかも満点。びっくりやうらしいやら…」



杉田理事長(中央)を囲んで



堀川企画委員長(左)と話が弾む



EJ駐日代表部のライター広報部長(中央)とドミニク報道室長(右)

ご提供ありがとうございました  
 左記の会員社から、特産品や名産品などをはじめ、多数の景品をご惠贈いただきました。

朝日新聞社 毎日新聞社 読売新聞社  
 日本経済新聞社 産経新聞社 ジャパ  
 ンタイムズ 日刊工業新聞社 日本工  
 業新聞社 スポーツニッポン新聞東京  
 本社 共同通信社 時事通信社 北海  
 道新聞社 陸奥新報社 デーリー東北  
 新聞社 岩手日報社 河北新報社 秋  
 田魁新報社 山形新聞社 福島民報社  
 下野新聞社 上毛新聞社 千葉日報社  
 山梨日日新聞社 信濃毎日新聞社 中  
 日新聞社 岐阜新聞社 新潟日報社



藤原日銀副総裁(右)もなつかしい仲間と再会

北日本新聞社 北國新聞社 京都新聞社  
 神戸新聞社 奈良新聞社 山陽新聞社  
 中国新聞社 四国新聞社 愛媛新聞社  
 高知新聞社 西日本新聞社 佐賀新聞社  
 熊本日日新聞社 大分合同新聞社  
 宮崎日日新聞社 沖縄タイムス社  
 琉球新報社 Q.U.I.C.K. 日本新聞協会  
 日本プレスセンター 日本放送協会  
 東京放送 日本テレビ放送網  
 日本短波放送 全国朝日放送 フジテレビジョン  
 テレビ東京 エフエム東京 エフエムジャパン  
 WOW OW 毎日放送 読売テレビ放送  
 札幌テレビ放送 宮城テレビ放送 テレ  
 ビ埼玉 新潟放送 東海テレビ放送



トリース外人記者クラブ会長(右)と那部専務理事

東海ラジオ放送 中国放送 広島ホーム  
 テレビ 新広島 四国放送 RKB毎日放送  
 福岡放送 テレビ西日本 衛星チャンネル  
 日本民間放送連盟 アラスカ 協同広告  
 シヤンドウィック・インターナショナル 大  
 中外製薬 帝国ホテル テュボン 電  
 通 電通パブリックリレーションズ 東京  
 ガス 東京機械製作所 東京電力 トヨタ  
 自動車 日本ABC協会 日本航空文化事  
 業センター 日本新聞インキ 日本中央  
 競馬会 日本電気協会 JR東海 JR東  
 日本 博報堂 三菱商事 メリルリン  
 チ日本証券(会員名簿順)



「今年もむずかしいなあ」—結果は1年後のお楽しみ

2000年(第28回)予想アンケート結果(2000年1月18日実施)		応募総数377
質問	正解	正解率(%)
①12月1日現在、わが国の首相は小淵恵三氏で	ない	49.2
②12月1日現在、小沢一郎自由党党首は自民党に所属して	いない	71.3
③2000年度のわが国の実質経済成長率(12月政府発表の実績見込み)は1%を	超える *1.2%	69.6
④年内にニューヨーク株式市場のダウ工業株30種平均株価が、瞬間風速で8000ドルを切る事が	ない	61.3
⑤ヒラリー・クリントンは11月の米上院選で当選	する	60.4
⑥ロシアのプーチン大統領代行は大統領選で当選	する	94.2
⑦年内に中国が有人宇宙飛行に成功	しない	77.9
⑧日本人がノーベル医学・生理学賞を受賞	しない	84.2
⑨シドニー五輪の女子マラソンで日本人選手が優勝	する	22.9
⑩勝利数が多いのは巨人・上原か西武・松坂か	松坂	53.8

\*白川英樹・筑波大名誉教授は化学賞  
 \*松坂14勝、上原9勝

# プロフィール

◇個人D会員

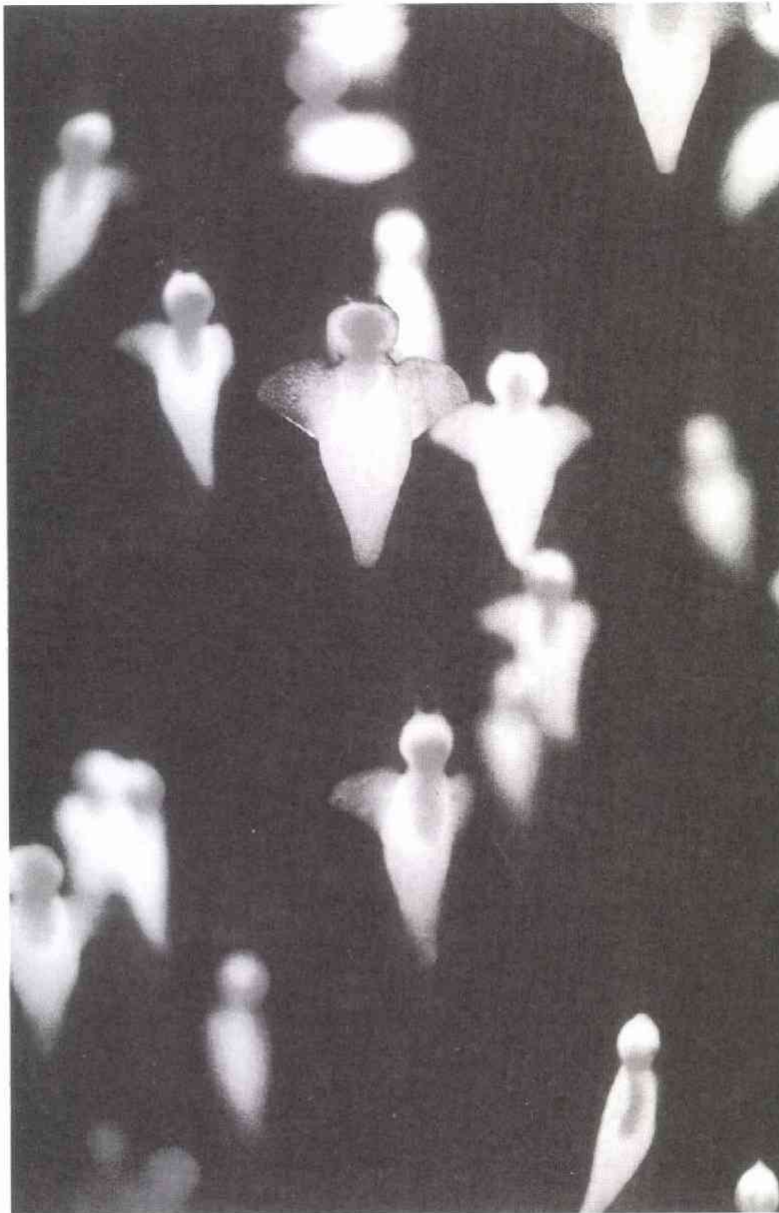
一月一日付入金の個人D、法人・個人賛助、特別賛助会員の方々です



# 写真部

写真 斎藤 良雄

(一九八八年産経新聞入社  
現在 東京本社写真報道局)



北の海のクリオネは「流水の妖精」の異名をもつ  
写真は神奈川県清川村の発明家が製作したもの

## 流水の妖精

声明(しょうみやう)が聞こえてくる。段々とポリウムが上がり遠く近く。漆黒の闇の中から音の波長に合わせて、人魂が近づいてくる。不気味だ。

暗黒の空間にふわりふわりと上下するほのかな明かり。息をするかのように、膨らみ縮む。揺れる物の怪の中に薄い朱色の生命がいきづく。

この写真は、貝殻を持たない貝「クリオネ」を、シリコーンゴムで作った模型の科学技術が作り出した。

『ベルギーの巨匠五人展』でシュールレアリスムの巨匠ルネ・マグリットの油彩「出現」を見たとき、なぜかこの写真を思い出した。

ぶよぶよの黒いアメーバのような絵。緑取りの青赤白の数珠が、中の黒がはみ出すことを許さない。他の人物を配した作品と全く異なる一点だった。

画布に無限の動きと広がりを描いた超現実の作品。自然を追究した人工の妙技。いずれも、とことん自然の中の何かに近づいていく。

今、ゲノムの時代。自然に逆らって人間は何を作り出そうというのだろうか。自然の中にすべてがあるのに。

(大留 明夫)

将棋の会 ぶらりとのぞいてみませんか

正直、うまい連中が来たたらどうしよう、というのが発会当時の不安だったけれど、よくしたもので集まったのは下手の横好き。だから毎月一回の例会は、奇声をあげながらの追いつ追われつ取りつ取られつ。オール平手で負けても勝ってもアツハツハツハ。いまだきあまりみられない希少価値、縁台将棋のクラブです。

次の例会は二月二十四日(土)午後一時から。参加費千円でウイスキーの用意あり。王より飛車をかわいがる方、とりあえずぶらりと見にいらいっしやい。待ってます。

(日比野和幸)

しゃぶしゃぶコースをお楽しみください

和食レストラン(九階)で二月末まで、しゃぶしゃぶコースをお楽しみいただけます。お一人四千円で肉のおかわりも可能です。

月替わりの献立で好評の会席料理も、初春の香りをおしらったものに替わっています。いずれも事前にご予約(電話〇三五〇三二二七二二三)のうえ、ご利用ください。

計報 和田教美会員(81歳、朝日新聞OB)が一月十二日肺がんのため、河村欣二会員(78歳、朝日新聞OB)が同十七日心不全のため死去されました。謹んでご冥福をお祈り申しあげます。

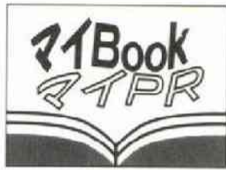
『宇宙飛行士になりたい!』

長沢 光男

(個人D会員 朝日新聞OB)

スペースシャトルと国際宇宙ステーションを扱う学習マンガのシナリオを、マンガは手塚プロという話に、二つ返事でのった。大の手塚ファンだった。宇宙は、スプートニク以来フォロ―し、アポロの月着陸はアメリカで取材した。執筆中は、ノリっぱなしだった。手塚に負けないほどのギャグを!「宇宙記者」にとつてのセンチメンタルジャーニーでもあった。そして、三人の孫たちが文章を読めるようになったらプレゼントする楽しみが待っている。

(集英社 一、二〇〇円)



『素顔の宰相』

富森 毅児

(個人D会員 朝日新聞OB)

「週刊二〇世紀」に連載したものを大幅に加筆して一冊にまとめた。登場するのは伊藤博文から森喜朗まで五十五人の首相と政界実力者三十八人。政治家の表の顔より裏に隠れた素顔を発掘することに努力した。

第三章の「現代宰相論」はこの本のために書き下ろした。首相の資質についての筆者なりの問題提起を試みたものだ。政治家の素顔とあわせて読めば、二十世紀の日本の政治史の一断面が浮かび上がるよう工夫した。

(朝日ソノラマ 一、七〇〇円)

クラブの電話

(ダイヤルイン)

- ・和食レストラン(9階) 3503-2723
- ・洋食レストラン(10階) 3503-2766
- ・貸室予約 3503-2724
- ・受付、宴会打ち合わせ 3503-2721
- ・クラブ行事への申し込み 3503-2722
- ・会員事務担当 3503-2725
- ・経理担当 3503-2728

会員現況 法人会員 一五〇社 基本会員 八二

一人 個人会員 一、八二四人 法人・個人賛助会員 七七社 二五人 特別賛助会員 六一人名誉・功労会員 一人

計 一二七社 二、九三五人

二月の行事(5日現在)

16日(金) 午後1時50分〜2時50分 エンフ  
バイル・モンゴル首相記者会見  
23日(金) 正午〜午後2時 フォーリー駐日  
米国大使昼食会

(行事案内電話) 〇三二三五〇三二七六四

会報委員会

委員長 住田良能  
委員 大留明夫 進藤 卓 仲 晃  
中澤孝之 平野恭子 堀江瑠璃子  
連絡 長谷川和子 本庄五月  
(電話) 〇三二三五〇三二七五二  
(FAX) 〇三二三五〇三二七二二